

アフガニスタンの現況から考える 平和とジェンダー平等

憲法第二四条「家族生活における個人の尊厳と両性の平等」と第九条「平和主義」の視点から、ジェンダー法や家族法を中心に研究する憲法学者の二冊の近著を紹介する。

各タイトルは、『世界』がここを忘れてもアフガン女性・ファルザーナの物語』と『ペンとミシンとヴァイオリン アフガン難民の抵抗と民主化への道』。二冊とも中東のアフガニスタンの現状を伝えることをテーマに据えるが、専門的な研究書の類いではなく、前者は絵本、後者は写真集である。札幌市内にある出版社から、今年（二〇二〇年）相次いで刊行された。

『ジェンダーに基づく暴力の研究をライフワークのひとつ』（絵本あとがき）とする著者は、大学勤務の傍ら、中東などの国や地域を訪れ、現地の平和運動に積極的に学んでいるといい、アフガニスタンもそんな訪問先の一つである。著者のアフガニスタン（国、人々）への思い、初訪問に至る経緯などは、両書のあとがきに詳しく説明されている。

著者が初めて同国に足を踏み入れたのは二〇一二年。その後数年間は年に一回程度のペースで訪

問を続けていたが、二〇一五年の訪問を最後に再訪が叶わなくなつて、その状態のまま今日に至っているという。というのも、9・11テロ後のアフガン空爆、タリバン政権の崩壊などを背景に、アフガニスタンの社会情勢はますます不安定化し、治安は悪化し、ビザの取得もできなくなっているため。こうしたなかで女性へのジェンダーに基づく差別はさらに深刻化しているという。

アフガニスタン再訪が叶わない状況が続くなかで発刊された両書には、かの国への思いを断ち切れまいとする著者の熱意を強く感じる。



まず、写真集『ペンとミシンとヴァイオリン』は、二〇一五～一五年の「RAWAのメンバーに会う旅の中で撮影してきたパキスタンやアフガニスタンの写真をまとめたもの」（はしがき）である。RAWAは「アフガニスタン女性革命協会」の略称で、一九七七年設立の同国初のフェミニスト団体。著者は日本国内で活動する「RAWAと連帯する会」のメンバーとしてアフガニスタンを訪れた。

写真集では、イスラマバードの難民キャンプや

首都カーブル（日本では「カブール」の表記が一般的）の状況を紹介しながら、「女性の団結の力を信じ、自由で平等な民主的社会の構築のために歩み続けてきたRAWAの活動を象徴する」（はしがき）とする「ヘワド高校」の活動や、二〇〇〇年前後以降に相次いで設立された諸団体、すなわち、「OPAWC（アフガニスタン女性能力促進協会）」、「HAWCA（アフガニスタンの女性と子どものための人道支援）」、「AFCECO（アフガニスタンの子供のための教育とケア）」による様々な女性対象の自立支援などの活動も紹介している。

タイトルの『ペンとミシンとヴァイオリン』は、OPAWCなどが主宰する「女性のエンパワメント」を目的とした識字教育、縫製技術の習得を中心とする職業訓練、芸術教育をそれぞれ象徴する単語を組み合わせたものである。宗教、歴史、慣習、政治など様々な要因が複雑に絡まって現在も続くアフガン女性へのジェンダー差別は、教育機会の格差・不平等にもつながっており、その是正による女性の自立の促進は、同国の民主化への道とも軌を一にしている。



次に、絵本である『世界』がここを忘れても』は、副題のとおり、架空の一人のアフガン女性を主人公に、現代のアフガン女性をめぐる生活環境や思いを紹介する内容である。

حتى اگر جهان اینجا را فراموش کند

『世界』がここを忘れても



著 清末愛砂 絵 久保田桂子

アフガン女性・ファルザーナの物語

書評

『世界』がここを忘れても
アフガン女性・
ファルザーナの物語

清末愛砂 著

寿郎社 2020年2月15日

86頁 1800円+税

主人公の名前はファルザーナ。設定上、彼女は、パキスタンのアフガン難民キャンプで生まれ育ち、現在は家族と首都カーブルで生活しながら、弁護士をめざして勉強中の大学生である。また、大学に通う傍ら、ある女性団体の事務所にも相談員のボランティアとして出入りし、ここに相談に

ペンとミシンとヴァイオリン



アフガン難民の
抵抗と
民主化への道

清末愛砂

寿郎社
定価 本体1800円+税

どれほど過酷な環境にあっても
教育こそが社会を変える――
日本の憲法研究者が見た、
ペン(識字教育)とミシン(職業訓練)と
ヴァイオリン(芸術教育)の方で闘う
アフガニスタン女性革命協会(RAWA)などの
エンバロメントの記録

書評

『ペンとミシンとヴァイオリン
アフガン難民の抵抗と
民主化への道』

清末愛砂 著

寿郎社 2020年8月31日

98頁 1500円+税

訪れるアフガン女性たちの抱える様々な問題にも触れる立場にある。
フィクションだが、主人公の人物像や、物語が展開する舞台となつている社会の状況は、実在するアフガン女性らから著者が聞き取った話などを材料に構築されており、「ノンフィクションに極

めて近いフィクション(あとがき)とされている。そのような前提で読むと、例えば、大学へ行こうと出発するファルザーナに、母親が爆弾テロへの対策として人通りの多いところを避けて行くよう注意を促すシーンには、それが日常生活の一面であることを考え合わせると尚更、よりリアルな恐怖を感じる。

◇ ◇

現在、日本を含め、世界がアフガニスタンになかなか目を向けなくなつている状況が見られるが、現地では民主化への努力が確かに続いていることをこの二冊は端的に教えてくれる。

私たち日本人にしてみれば、アフガニスタンも含め、世界の紛争地域の現状を知ることが、それとの比較を通じて日本の社会・憲法の現在地を客観的に測定・分析する鏡にもなりうる。著者の意図は、一般の読者には難解な論文ではなく、あえて絵本および写真集というかたちで問題提起を行うことで、より幅広い層に対して問題意識の共有を図ろうとしていることにあると解する。そうであれば、こうした著者の意図がなるべく多くの人々に受け取られることを願う。

△評者＝正木浩司・当研究所研究員▽